Committee of 100 Highschool Students〈報告書〉

高大接続・大学入学者選抜制度改革 全国高校生100人委員会

代表理事あいさつ

「全国高校生 100 人委員会」の活動に取り組もうと決めたのは、18歳選挙権が認められたことを受け、モデルとなる事業を具体化したいと思ったからです。私共が取り組んでいる社会教育活動は「学ぶ主体の学ぶ意欲」を基本としています。そこで高校生たちが「自分の政治課題」を議論するテーマには、身近な問題である大学入試の改革案問題が良いと考えました。

この活動で大切にしたのは多様性です。そのため、北海道から沖縄まで全国に参加の募集をかけ、学科も普通科から総合科、全日制から定時制・通信制まで、多様な高校制度を反映できるように参加者を集める方針を立てました。もちろん、全国各地から参加者が参加するため、距離の問題や、全国会議に参加するための費用の問題などがありましたが、しっかりとした社会教育活動を行えるように挑戦いたしました。

この活動を経て、若者たちの育成には熟議が有効だということを実感いたしました。ぜひ、その成果についてはこの報告書をご覧いただき、ご理解いただければ幸いです。

特定非営利活動法人 教育支援協会
代表理事　吉田 博彦

特定非営利活動法人 教育支援協会の概要

1998 年末、特定非営利活動促進法成立を受けて、設立を申請。
1999 年 6 月、当時の経済企画庁の認証を受け、日本で最初の教育分野の NPO として活動を開始。2000 年代初頭には、NPO を普及させるべく全国各地に支部を結成。その後、各支部が事業を拡大し、教育支援協会の支部は全て、具体的事業活動を行う独立した NPO 法人となる。その結果として、教育支援協会本部は、教育の現場を持たずに、教育における政策提言、調査研究を中心に活動している。そして、その活動を、具体的な教育事業を実践する全国各地の NPO ネットワークが支えることで、日本の教育をリードすることを目的に活動に取り組んでいる。

INDEX

03〜04　全国高校生 100 人委員会を振り返って
05　参加者の育ちと変化
06　－事務局の観点から－
07　－参加者の観点から・座談会－
09〜11　－参加者の観点から・インタビュー－
12　－参加者の観点から・アンケート－
13　全国高校生 100 人委員会の運営
14　－寺脇氏から見た全国高校生 100 人委員会－
15〜18　－Comm100 の活動－
19〜22　全国高校生 100 人委員会における教育的効果

主　催：特定非営利活動法人　教育支援協会
後　援：文部科学省
協　力：螢雪時代

全国高校生100人委員会を振り返って

特定非営利活動法人 教育支援協会　理事／事業部長　鈴木 菜津美

発足当初に掲げた「文部科学省に高校生の生の声を届ける」「高校生が自分自身の目線で求める教育のあり方・形を考える」という事業のミッションは、昨年の文部科学省への提言提出をもって無事に終了いたしました。そのミッションに加えて、この全国高校生100人委員会（以下Comm100）には発足当時から大切にしている柱がありました。

まずは「全国各地から多様な高校生を集めること」でした。この類の活動においては運営上の利便性が起因して、東京がメイン会場になる傾向が強く、遠方から参加したいと考える高校生にとって、負担すべき費用や、上京すべき回数が多いために日程的な負荷が大きく、どうしても東京集中型の企画になりがちな状況がありました。Comm100ではこうした遠方からの参加者にもなるべく対等に、せめて少しでも参加へのハードルを下げるために、「プレ会議」を「全国会議」への準備期間と位置づけました。「プレ会議」には、事務局が出向き、メイン会場を運営し、各地の参加者が少負担で一度は「プレ会議」に参加できる状況を実現することに取り組みました。

◆参加者の属性①

	男性	女性
北海道	1	5
東　北	4	6
関　東	12	19
中　部	0	3
近　畿	2	1
中　国	1	2
四　国	3	1
九　州	4	4
沖　縄	1	4
合　計	28	45

さらに、2016年8月に東京で開催した「全国会議」へは、交通費・宿泊費・食費・アクティビティに係る費用の一切は自己負担なく参加できるようにいたしました。これにより、全国どこにいても、どんな状況下の参加者でも本番の熟議である「全国会議」に参加できるようになりました。

2016年4月に参加者の募集を締め切った時点で全国から多様な73人の高校生（参加者の属性①②参照）がこの活動に参加し、「全国会議」には17都道府県から47名が集まりました。

次に「ICTを活用して距離を越えたコミュニケーションをとる」という観点を常に意識して活動を行いました。ICTの発達が進んでる昨今、高校生の大多数は個人のスマートフォン、タブレットを所有しています。一方、上述のようにこの活動は全国各地（ともすると留学中の参加者は海外に在住）に参加者がおり、約1年に渡ってこの距離を越えてコミュニケーションをとり続けられる環境、さらには全国各地で開催される「プレ会議」ではメイン会場に出向けない参加者も熟議に参加することが必要です。よって、この事業の成功の鍵はICTをいかに活用し、円滑に高校生が運用できる状況を用意するかでした。

この活動では高校生の利便性を考慮し、ほぼすべての参加者が（活動に参加する前から）活用していた「LINE」を連絡手段のメインツールに位置づけ、さらにプレ会議等では「Popcorn」という同時通話無料アプリを導入しました。プレ会議も回数が進むにつれてこれらのツールを参加者自ら上手に活用するようになり、事情によってプレ会議に音声で参加できない高校生（通学中の公共交通機関から参加している、ホームステイ中なので深夜の参加になるため声を出せない状況など）には「Popcorn」で会話を聞きながら「LINE」で文字を打って自分の意見を述べて熟議に参加するという手法も生み出されました。

毎回のプレ会議では、必ず最後にメイン会場の参加者がグループ毎に模造紙を用いて熟議のまとめを発表するのですが、あらかじめ参加者全員のLINEスレッドに模造紙を写真で貼り付けておき、オンラインの参加者も同じグラフィックを目視しながら音声を聞いて発表のまとめに参加するという、より実用的なICTの活用方法まで見出したのです。

そして最も大切にしてきたこと、それは、「参加する誰もが安心して自分の考えや想いを話せる居場所をこの活動の中に作り出すこと」でした。この活動には居住地、学校の種類、学年、性別、そして置かれている環境も様々な高校生が参加していました。そのような状況下で疎外感や劣等感を持ってしまう参加者がいることは、熟議を進める上では不要な障害物にしかなりません。万が一、そのような理由で参加者の意見が十分に取り入れられなければその時点で本来の事業目標である「多様な高校生の意見を文部科学省に届けよう」というコンセプトからも脱線してしまうのです。

そのため、プレ会議では毎回、そのことを参加者にメッセージとして伝え続けることを心がけました。この活動に参加した高校生はこのような活動に何度も参加しているメンバーもいれば、そうではないメンバーもいました。日ごろからディベートや弁論等、アウトプットを頻繁に行っているメンバーもいれば、人前で話すことがあまり得意ではないメンバーもいました。時にはそのようなメンバーの足並みが揃わなくなる事態も生じました。しかし、「自分の考えや思いを伝えることが大切。」「自分の考えや思いを伝えるだけではなく、聞く耳を持つことも大切。」そして何より、「自分との違いに気づき、その中にある共通点を見つけて理解しあう姿勢が何より大切。」と事務局や有識者が発信し続けるうちに、参加している高校生もそのことを体感していくようになったと感じています。

さらに、約半年に及ぶプレ会議期間中、有識者のお一人である寺脇研氏は全てのプレ会議の会場に足を運んでくださいました。毎回、プレ会議の冒頭でComm100が活動する意義や目的を分かりやすく高校生に伝え、高校生の熟議の様子を見守りました。（寺脇氏は「Popcorn」を活用し、全ての熟議グループの熟議を聞くことができた。）寺脇氏の存在は高校生に「自分の考えを伝えるとこんなにも熱心に耳を傾け、受け止めてくれる大人がいるんだ。」という安心感をもたらしたのだと考えています。

最後の広島プレ会議で寺脇氏が高校生に語り掛けました。「全国会議が終わって帰りの飛行機や新幹線に乗ったときに『あーー、もっと話しておけばよかった。あんなことも、こんなことも言いたかったのに』って後悔をするような全国会議を過ごさないように、みんないっぱい話そうね」と。

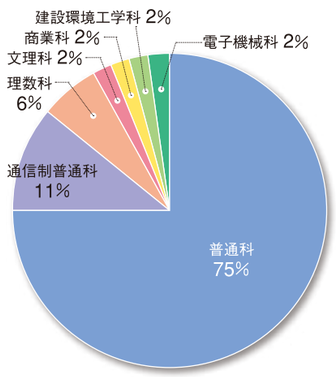
その言葉通り、参加者たちは全国会議の期間中は、実によく相手と向き合って昼も夜も話し合いの日々を過ごしました。常にお互いに納得し合うまで、理解し合えるまで、とことん話し合おうという姿勢がどの参加者からも湧き出ていたように感じます。熟議のプロセスが若者の育成にいかに有効な手段であるかということが証明されました。

この活動に参加した全国各地の仲間たちは、ここで培ったネットワークや社会との接点を活用し、引き続き大きく成長し続けることでしょう。出会ったComm100のつながりを大切に育み、共に切磋琢磨し、熱く熟議を重ねながら日本の未来に貢献することを切に願っています。

皆様にも今後の日本の将来を背負う若者の頼もしさと、無限に広がるその可能性に思いをめぐらせていただければ幸いです。

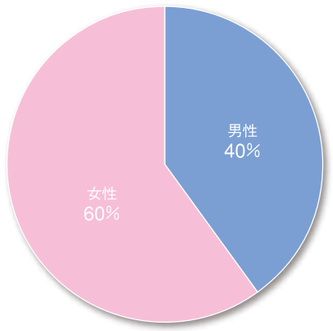
◆参加者の属性②

所属する学科



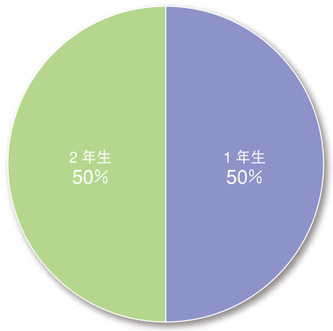
男女比

女性が応募者の6割を占める。



学年構成（活動開始時点）

高校1年生と2年生は半々ずつ。



参加者の育ちと変化

ー事務局の観点からー

ー参加者の観点からー

・座談会
・インタビュー
・アンケート

◆全国会議参加者47名

糸井 あかり（3年）
共愛学園高等学校

江川 綺重（2年）
長崎県立五島海陽高等学校

江藤 康介（2年）
福岡県立三池高等学校

大井 菜ノ香（2年）
浦和明の星女子高等学校

大崎 樹哉（3年）
八戸工業大学第二高等学校

大森 凪（2年）
福島県立いわき光洋高等学校

岡田 あや乃（3年）
麗澤高等学校

沖本 祥（2年）
AICJ 高等学校

小田部 若菜（2年）
熊本県立熊本西高等学校

小原 彩美（2年）
札幌大谷高等学校

金子 汐里（3年）
捜真女学校

兼弘 真希（2年）
AICJ 高等学校

川田 泰羽（2年）
平山学園清林館高等学校

河野 ありす（3年）
中央国際高等学校

北原 和季（2年）
川崎市立川崎総合科学高等学校

工藤 有紗（3年）
北海道札幌月寒高等学校

國吉 彩花（3年）
沖縄県立那覇国際高等学校

栗原 郁幸（3年）
共愛学園高等学校

小嶋 大生（3年）
筑波大学附属駒場高等学校

佐藤 花（3年）
立命館慶祥高等学校

下杉 瑠菜（2年）
北海道札幌旭丘高等学校

庄司 伊織（2年）
横浜隼人高等学校

白石 司（3年）
クラーク記念国際高等学校

菅原 衣織（2年）
札幌新陽高等学校

①多様性への理解

この活動には全国各地から様々な環境の高校生が参加しており、自分とは異なる社会に身を置く「高校生」と触れ合うことで、自分と相手の「違い」に自然と気づいていった。「違い」を認識して自分と比較することで、自分自身を客観的に見つめ直し、自分の置かれている環境に感謝する一方、違う立場から熱心に耳を傾けてくれる人がいることを知り、自己肯定感を高めていった。「違い」に気づき、お互いを受け入れ合い、多様性を理解することで自分の視野や世界を大きくすることができ、知見や人間性が広げられたのである。

②多様な人との触れ合いによって新しい価値観が生まれる

全国会議は東京で開催したため、参加者は全国各地から東京へ集結した。アイスブレイクでは地元のお土産を持ち寄り、お土産の説明をして交換するゲームを行った。地元の特産品について参加者の前で説明し、意外にもその特産品が全国に知れ渡っていることを知ることがあり、自分の故郷に自信を持つようになっていく様子も見えた。全国会議２日目の「東京オリエンテーリング」では関東圏と遠方からの参加者の混合グループで街に繰り出し、東京を観光しながら、熟議テーマ以外の様々なことについて話す時間を設けた。遠方からの参加者は東京で目にする物、出来事に驚き、その姿を目の当たりにした関東圏の参加者は逆に「地方」について考えるなど、様々な気づきを得た様子だった。

このように様々な体験を共にすることによって、参加者は新しい価値観を身に付けていった。参加している高校生は出身地や環境が異なっても、日頃、自分の身近にいる高校生と大きく異なる事はなく、「皆、自分と同じ高校生なんだ」という仲間意識や安心感を得た様子であった。どんな時でも相手が持っている能力や価値観を理解し、表面的ではなく相手の本質をみることの重要性を参加者一人ひとりが体感した。

千賀 啓世（2年）
淑徳高等学校

多和田 茉夏（3年）
沖縄県立普天間高等学校

對馬 莉乃（2年）
青森明の星高等学校

仲村渠 智紗都（2年）
沖縄県立向陽高等学校

並木 優人（3年）
横浜隼人高等学校

西岡 早紀（2年）
青森明の星高等学校

比嘉 絵野（3年）
沖縄県立球陽高等学校

藤井 友惟（2年）
AICJ 高等学校

藤澤 祐大（2年）
青森県立青森高等学校

星崎 伶奈（3年）
共愛学園高等学校

松岡 巧（2年）
開成高等学校

松田 あかね（3年）
久留米市外三市町高等学校
組合立三井中央高等学校

松本 歩純（2年）
平山学園清林館高等学校

松本 悠太郎（2年）
福岡県立城南高等学校

松山 泰斗（2年）
立命館慶祥高等学校

丸山 遥奈（3年）
淑徳高等学校

三浦 菜月（2年）
青森県立青森高等学校

南 摩耶（3年）
福岡雙葉高等学校

宮本 卓明（3年）
宮崎県立宮崎西高等学校

村木 菜生（2年）
共愛学園高等学校

安田 龍人（2年）
沖縄県立北中城高等学校

吉田 暢夏（2年）
横浜隼人高等学校

渡辺 剛気（2年）
千葉敬愛高等学校

（2016年11月2日時点）

多様性が新たな学びを生み出す　高校生100人委員会

鈴木 菜津美
特定非営利活動法人 教育支援協会　理事／事業部長

北原 和季（2年）
川崎市立川崎総合科学高等学校

松田 あかね（3年）
久留米市外三市町高等学校組合立三井中央高等学校

三浦 菜月（2年）
青森県立青森高等学校

鈴木：一昨年12月の東京オリエンテーションで熟議テーマを検討してから約１年。各地のプレ会議から始まった高校生100人委員会だけど、最初はどんな思いだったのかな？

北原：ボランティアをしていたNPOの方に勧められて、最初はおもしろそうかなという好奇心からでした。でも応募エッセイを書いているうちに、いろいろな意見がわいてきて、あっという間に文字数オーバーに。自分にこれだけの考えがあるんだと気づいたんです。

松田：こういう活動は初めてで、生徒会との両立もあってできるのかちょっと不安でした。でも考えが変わったのは九州プレ会議で熟議の進行をするファシリテーターになったとき。みんなから意見を引き出すために、経済的な理由で中退した友達のことなど自分の経験を話したんです。すると、他のメンバーから「ドラマの世界だと思っていた」と言われ、自分が伝えなければ、こういう事実をみんなは知ることがないと気づいたんです。そう思ったらやる気が出てきました。

三浦：LINEもこのために初めて使ったぐらいで、ネットでのコミュニケーションもあまり経験がなかったんです。だから最初はやっぱり自分の意見を言えず受け身でした。でも沈黙が続くと困るというファシリテーターの苦労が東北プレ会議に参加してわかってからは、積極的に参加するように。全国会議に向けて、東北地区の方たちと頻繁に連絡しあいコミュニケーションを取るようにしました。

全国から集まるメンバーの多様性こそが気づきの元に

鈴木：８月には東京で全国会議。初めて会う子ばかりだったはず。やっぱり緊張したかな？

松田：プレ会議があったおかげで、リアルでは初めてでもよく知っている感じでした。オンラインでは難しい話をしてた人も、実際に話すと普通の高校生だったり、いろいろな発見もありました。

三浦：メンバーそれぞれの環境がぜんぜん違うことにびっくりしました。でも別の世界のように見えて、やっぱり同じ高校生。共通の話題では盛り上がるし、同じ意見のことも多い。自分の知らなかった世界のことにも親近感を感じるようになりました。今でも天気予報で「○○地方が大荒れです」とか聞くと、その地区から参加していたあの子はどうしてるかなと思うように。

北原：その地方に住む人の生の声を聞くことができたので、新聞などの実際の報道と現地の感覚・意見が違うことがあることもわかりました。例えば沖縄の基地問題も反対意見だけではないとか、世代間でも意見が違うことも沖縄のメンバーたちから教えてもらいました。

お互いを認め合い夢を語った全国会議

鈴木：いろんな話をしていたのね。熟議をまとめるだけでも大変かなと思っていたけれど、実は全国会議終了後のアンケートでは「もう１泊欲しい」という答えが多かったの。楽しかったのかな？

３人：楽しかったです！本当にもう１泊欲しかった！

鈴木：一昨年12月の東京オリエンテーションで熟議テーマを検討してから約１年。各地のプレ会議から始まった高校生100人委員会だけど、最初はどんな思いだったのかな？

北原：ボランティアをしていたNPOの方に勧められて、最初はおもしろそうかなという好奇心からでした。でも応募エッセイを書いているうちに、いろいろな意見がわいてきて、あっという間に文字数オーバーに。自分にこれだけの考えがあるんだと気づいたんです。

松田：こういう活動は初めてで、生徒会との両立もあってできるのかちょっと不安でした。でも考えが変わったのは九州プレ会議で熟議の進行をするファシリテーターになったとき。みんなから意見を引き出すために、経済的な理由で中退した友達のことなど自分の経験を話したんです。すると、他のメンバーから「ドラマの世界だと思っていた」と言われ、自分が伝えなければ、こういう事実をみんなは知ることがないと気づいたんです。そう思ったらやる気が出てきました。

三浦：LINEもこのために初めて使ったぐらいで、ネットでのコミュニケーションもあまり経験がなかったんです。だから最初はやっぱり自分の意見を言えず受け身でした。でも沈黙が続くと困るというファシリテーターの苦労が東北プレ会議に参加してわかってからは、積極的に参加するように。全国会議に向けて、東北地区の方たちと頻繁に連絡しあいコミュニケーションを取るようにしました。

全国から集まるメンバーの多様性こそが気づきの元に

鈴木：８月には東京で全国会議。初めて会う子ばかりだったはず。やっぱり緊張したかな？

松田：プレ会議があったおかげで、リアルでは初めてでもよく知っている感じでした。オンラインでは難しい話をしてた人も、実際に話すと普通の高校生だったり、いろいろな発見もありました。

三浦：メンバーそれぞれの環境がぜんぜん違うことにびっくりしました。でも別の世界のように見えて、やっぱり同じ高校生。共通の話題では盛り上がるし、同じ意見のことも多い。自分の知らなかった世界のことにも親近感を感じるようになりました。今でも天気予報で「○○地方が大荒れです」とか聞くと、その地区から参加していたあの子はどうしてるかなと思うように。

北原：その地方に住む人の生の声を聞くことができたので、新聞などの実際の報道と現地の感覚・意見が違うことがあることもわかりました。例えば沖縄の基地問題も反対意見だけではないとか、世代間でも意見が違うことも沖縄のメンバーたちから教えてもらいました。

お互いを認め合い夢を語った全国会議

鈴木：いろんな話をしていたのね。熟議をまとめるだけでも大変かなと思っていたけれど、実は全国会議終了後のアンケートでは「もう１泊欲しい」という答えが多かったの。楽しかったのかな？

３人：楽しかったです！本当にもう１泊欲しかった！

４日目。もう少しあれば熟議の結果をまとめる余裕もできたし、もっと深い話もできたと思います。

松田：熟議の時間だけじゃ語り足りなくて、夜も話したり（笑）でもその時間が次の日の熱い会議につながったと思います。熟議も大切だけど、時間外にロビーでみんなで話していたこともいい思い出になりました。

鈴木：寝なさい！って言ってたけど、やっぱりそうだったのね（笑）プライベートな話もしてたのかな？

松田：将来の夢とかもたくさん話しましたね。私は商業科なので、とりあえず商業系の大学を目指そうかなと漠然と思っていただけだったんです。でも「格差・学歴」のグループで調べるうちに、だんだんと自分の目標が明確に。夢がしっかりと決まったのはこの委員会がきっかけなんです。

北原：僕もいろんな人と話をして、自分の経験ではまだまだ世界が狭いということを感じました。物事にはいろんな見方があること、それはそれぞれの環境でのれるんだということを改めてわかることができました。

三浦：私は小さい時から特になりたいものがなかったんです。高校生になって進路も決められず、焦りも感じていました。でもこの高校生100人委員会のプレ会議や全国会議を通して、教育にすごく興味がわいてきて、もっと勉強したいと思うようになったんです。私にとっては夢が見つかった大事な会議になりました。

みんなの思いが詰まった提言書は未来への大きな期待

鈴木：11月に提言を文部科学省に提出しに行ったのも大きな出来事だったんじゃないかな？三浦さんが代表として堂々と意見を言い切ったのはすごいと思った！

三浦：当日は事務次官をはじめ偉い方々がいっぱいいるし、カメラの数も多くてびっくり。ガタガタ震えちゃいました。またその場で話す原稿を考えるのも、かなり悩みました。やっぱりこれまでのみんなの思いを盛り込みたかったですし。でも緊張を乗り越えて、伝えたいことをはっきり言えたことは自信につながりました。

鈴木：提言を提出し、100人委員会の活動が終わった今はどんな気持ちかな？

北原：僕らの提言がどこまで関係しているかわかりませんが、最近も奨学金の無償化など大きな動きがあるので、少しは変化への力になれたかなと思います。もし意見が届いたのであれば、とてもうれしいですね。

松田：提言書の言葉を見ると、夏の全国会議が蘇ってきます。自分たちはもう卒業してしまいますが、弟世代ぐらいのできるだけ早い段階に影響を与えることができればと思っています。

三浦：提出した達成感というよりも「この先期待しています！」と言う気持ちです。みんなが本当に頑張って考えた提言書。ぜひそのままにせず、絶対に活かしてほしいと強く願っています！

（2017年1月28日の座談会・インタビューより）

異なる視点を持てたのは本気の議論があったから

川崎市立川崎総合科学高等学校

北原 和季（2年）

自分自身で一番変わったと感じるのは、物事の見方です。高校生100人委員会に参加したことで、自分が想像可能なことだけではなく、同じ高校生でもまったく違う世界や環境、異なる考え方があるんだということがわかったんです。だからこれまでの考え方に、さらにプラスアルファした新たな考え方ができるようになったと思っています。考え方にバリエーションができたというか、幅が広がったという感じですね。

学校では得られない本音の議論ができた場所

自分の家庭環境もそんなに良くはなかったんですが、他の人にもいろいろなつらい環境があるんだということも知ることができました。全国会議ではグループで話をするときに、僕を含め腹を割って自分の経験を話していくうちに、本当にいろいろな意見が出てきたんですよね。泣きながら自分の過去を話す人もいました。僕も学校ではそんな話はあまりしないんですが、高校生100人委員会は自分を出せる場というか、自分の本当の思いを言ってもいいかなという感じがしたんです。だからうわべだけの意見じゃない、本心からの意見が出せたと思ってます。学校の授業で教育について考えようとなっても、絶対そんな意見は出ない。この委員会のメンバーは、自らそういうことに関りたいと思って参加しているからこそ、たくさんの良い意見が出たんだと思います。

高校生ってやっぱり頑張る姿を見せるのはどうかという気持ちもあって、いつもは表に出さず普通にしているんですが、あの会議では表に出しても、みんなそれを受け止めて、その一生懸命さを委員会のメンバーは認めてくれる。そういう人たちがいるということがうれしくて、教育という大きな議題の上で安心して自分の意見が言える場所だった気がします。

別の視点を常に持つそれは社会へと続く力に

実はその後もメンバーと教育関係の講演会にいったり、意見交換したり。ファミレスで高校生同士が「文科省が…」とかしゃべっています（笑）自分の興味ある社会的な問題を真面目に話せる仲間ができてよかったです。

これまでは文部科学省に対しても否定的な意見しかなかったんですが、文科省の担当の方の話を聞いたり、メンバーたちと意見を交わしていくうちに、できない部分には理由があったり違うやり方があったりと、自分が今まで知らなかったことも含めた意見に変わってきました。変えるならそこだけではなく、全体を見直す必要があることもわかりました。その考え方は普段の生活でも活かせますよね。あるひとつが変えられないなら、全体をもう一度見直してみよう、あるいは別の視点から見直してみよう。そういう新しい考え方は、今後社会に出てからも力になると信じています。

保護者からの声

参加することで、全国の様々な環境下の高校生の話を聞き、わかってくれるはずがないと思っていた国の方々も彼らの話に耳を傾け、動いてくれたことを肌で感じ、声を上げることが無駄ではないと思ってくれた感じがします。また、自分たちには間に合わなくても、下の世代で良くなればという礎になるのもいとわない考え方ができるようになったのには、とても感動しました。中学生バージョンや、参加した高校生のその後などもあれば良い。これで終わりは寂しい気がします。

様々な人とのつながりが自分を成長させる鍵に

久留米市外三市町高等学校組合立三井中央高等学校

松田 あかね（3年）

この委員会の活動を通して、成長したことはたくさんあります。関ってくださった大人の方々とちゃんと話ができたことは、今後の社会生活においてとてもためになったと思っています。それまでは大人と話す機会が少ないこともあり、大人は頭が固いというような勝手なイメージも正直あったんです。私は生徒会長なのですが、生徒会でもどうせ先生に納得してもらえないからと、やりたい案を出さないことも。でも今は、もし突き返されたとしても、もう一度改善してみたり相手にどうやったらわかってもらえるのかを考えるようになりました。

またこの委員会がきっかけで、広がった人脈も大切にしたいと思っています。実は弁論大会でこの委員会の経験を話したところ、西日本新聞が取り上げてくれたんです。そうしたら記事を読んだ人からたくさんお手紙をいただいたり、他校の先生が記事を教材に使ってくださったりしました。

メンバー皆が違う環境だからこそより深い理解が生まれる

委員会では「格差・学歴」を熟議のテーマに選びました。それは経済的な問題で高校を中退せざるを得なくなった友人のことや、留学したいけれど高校卒業後働いてお金を貯めてからじゃないと…という友達や自分の体験からです。高校生100人委員会は様々な環境のメンバーが参加しているので、そんな話が現実にあるんだと初めて気づいてくれた人もいました。だから実際に体験している自分がちゃんと声を上げなければ、事実が伝わらないと強く感じたんです。

でもそういうメンバーたちも、自分の環境や留学経験を自慢するわけでもないし、私の考えや環境を理解しようとしてくれる。まったく違う環境だから新しい発見の方が多くて、お互いの状況を尊重したうえで話をすることができたと思います。その熟議から、現状の奨学金や格差の問題についてより深く知り、どうやったらどんな人にも平等に教育のチャンスを与えられるんだろうと、深く考えることができました。

いつか自分が誰かを支える立場になるために

そして一番大きな成長は、この委員会がきっかけになり、それまでは漠然としていた未来の目標を決めることができたことです。春から長崎大学夜間部で経営を学ぶのですが、それは「いつか会社を立ち上げ、その利益で奨学金を出したい」という夢の実現のためです。夜間だと世代の違う方も多いですし、いろいろな立場の人と話をしてみたいですね。また、学長さんが奨学金や子供の貧困に興味があると知人から聞いたので、ぜひ直接話を聞いてみたいと思っています。

そして最後に、この活動を一番応援し、つらい時にはアドバイスもしてくれた父に感謝したいと思います。

保護者からの声

本人の希望もあり、若い時のいろいろな経験や人を知るということは、彼女の今後の人生にとって大きなプラスになると思い参加させました。

この高校生100人委員会によって、高校生たちのネットワークを通して、社会が抱えている問題に興味を持ってもらえたらと感じています。そして微力ながら、その行動を大人たちが後押しできるようになれたらと考えています。若い人たちが頑張っている姿や話を聞くことで、大人も元気をもらうことができると思います。

自分の殻を破り 得られたのは自信と夢

青森県立青森高等学校

三浦 菜月

（2年）

実は人見知りなんです。初対面でうまくいかないとずっと引きずってしまうので、学校でも友達と最初にしゃべれないと、そのままに。だから学校ではぜんぜん話さず、おとなしい方なんです。

そんな私が知らない人としゃべったり、自分からコミュニケーションをとれるようになったことは、大きな成長です。高校生100人委員会のメンバーは、全国から集まったみんな知らない者同士というところがスタートライン。だから相手をもっと知りたいと、フレンドリーに話しかけてくれたり、こちらが言うことも否定せず尊重して聞いてくれたりしたことが、私の助けになりました。さらに様々なバックグラウンドを持つメンバーの話を聞くことで、生きている時間は同じなのに、こんなにいろいろなことができる可能性があったんだという発見もありました。

初めての自分の夢を見つけることができた１年間

自分の意見をこんなに自信をもって言えるようになったことは、本当に自分の宝物。この１年、会議では賛成でも反対でもはっきり出していいという雰囲気だったので、自分の思いをしっかり伝えられるようになりました。私がこんなに強い気持ちで言えるようになったのを、学校の友達が見たらきっとびっくりすると思います（笑）

そして、もうひとつの宝物はこの会議で“教育”という自分の将来の夢が見つかったこと。小学校の時からなりたいモノが無くて、授業参観で“将来の夢”を発表しなくてはならない時も「今は何もないけど、何か夢ができた時に困らないよう勉強をがんばります」と言ったほど。結局そのまま高校生になっても、やりたいものがないから進路も決められないという焦りばかりでした。でも今回の活動を通して様々なことを調べていくうちに、教育には大きな可能性があると感じたんです。何も持っていなくても、教育があるかないかでその人の内面はかなり変わってくる。その人の人生を豊かなものにもそうじゃないものにも変えられる教育には、見えない力があると思ったんです。

私が得た貴重な経験を次の世代に渡したい

学校では人見知りでしゃべれない私も、外に出ることで変わることができました。だから学校以外の活動も、とても重要だと感じています。自分とバックグラウンドが違えば、同じものを見ても全然視点が違います。そんな異なる環境の人たちが集まることは、誰にでも刺激になると思うんですよね。自分が経験した学びをほかの人にも経験してほしい。そのために将来は教育の分野に進み、興味を持っている人だけに限らず、みんなにそんな場を提供することに関りたいと思っています。その経験は、まさに私が成長し変化したように、絶対に視点が変わると信じています。

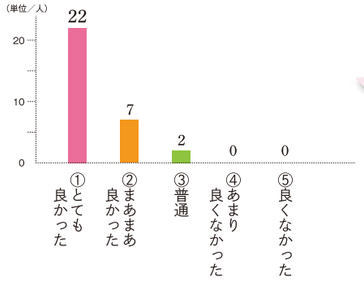
保護者からの声

学校の中では取り組むことのない課題を深く考え、異なる環境や考え方を持つ人々と意見を交わすことで、ひと回りもふた回りも成長したと思います。これまで進路の目標がないと言っていた娘ですが、今回の活動に参加したことで、教育行政にかかわる仕事がしたいと、進みたい方向が決まったようです。多くの出会いと体験があり、とても積極的に自分の意見を言うようになったと思います。今回のすべての活動が、これからの原動力となる財産だと思いました。

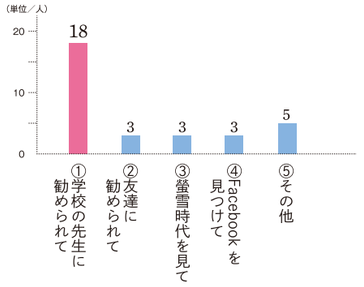
全国高校生 100 人委員会 参加者アンケートのまとめ

（全国会議参加者へのアンケートより）

1. この活動に参加した感想は

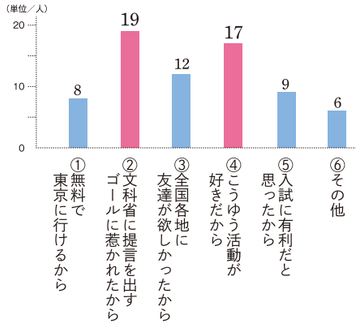


2. この活動に参加したきっかけ（複数回答可）



全国の都道府県教育委員会に参加者募集のリリースを出しており、その結果として学校の先生に勧められて参加したメンバーが多かったと考えられる。

3. この活動に参加した理由（複数回答可）



「文科省に提言を出すゴールに惹かれたから」という意見が多く、活動のゴールを明確に示して募集したことが効果的だったと考えられる。また、このゴール感が一致していたからこそ、長期に渡る活動にも継続的に取り組めたと推察する。

「この活動に参加した感想」の一部を紹介します。

「①とても良かった」と答えた方の感想

一年以上かけて熟議することや提言作成という同じゴールでも、それぞれの分野や視点から考えることですごく深くまで自分たちの考えを掘り下げられたと思う。全国のいろいろなバックボーンを持って、いろんな環境で学んでいる高校生がいることがわかって、提言を出すのと同じくらいメンバーとの出会いも大切なものになりました。ありがとうございました。

きっかけは些細なことでしたが、実際に活動して、予想以上の成果、達成感を得ることができたから。自分の意見をしっかりと持って、それを行動で示している同年代がこんなにもたくさんいるんだと感銘、そして刺激を受け、確実に経験値をあげることができた。

一年の努力とみんなの思いが無事一つの提言としてまとまったことがとてもうれしかったし、やりがいを得られた。

多種多様な人とたくさんのことを話せて貴重な体験ができた。話し合いで疑問に思ったことを調べることで知識を増やせた。また教育にすごく興味をもち将来の道の糧となった。

様々な背景を持つ仲間たちのとの交流を通し、自分の考える視野が大きく広がったことを実感しています。SNS を利用して、仲間たちとこれからも関わっていけたらと思います。

「②まあまあ良かった」と答えた方の感想

高校生が主体的に議論を進め、文部科学省の方々に提言を提出することが出来たこと、そしてこの活動に参加していなければ出会えなかったメンバーの方々ともつながりを持てたことが何より大きいです。私は彼らから、地元に対する試みや抱える様々な問題など、たくさんの刺激を受けました。それは、希望を持てるものも、現実を突きつけられるものもあり、今まで自分がどれだけ狭い世界で生きてきたのかを思い知らされ、実のところ何度も「私みたいな人がこの活動に参加していていいのかな」と感じました。

活動内容自体はとても良かったのですが、「全国から高校生を集める」という都合上、どうしてもインターネットを主に使用することになってしまい、私のような情報弱者がやや不利だったこと。そして、グループを分けて議論していたことにより、議論の自由さがやや規制されてしまったように感じたので少々評価を下げました。

アンケート実施日：2016年11月21日～12月29日
対　象：全国会議参加者47名
回答率：65％（31名）

全国高校生100人委員会の運営

螢雪時代掲載誌面
（2015年8月号～2016年12月号）

2015年8月号

2015年9月号

2015年10月号

2015年11月号

Comm100有識者として、全ての「プレ会議」に出席

寺脇氏から見た全国高校生100人委員会

京都造形芸術大学マンガ学科教授　寺脇 研

高校生100人委員会は最初から高校生たちの活気に満ちていた。2015年12月6日に渋谷で開かれた東京会場・キックオフ会議に参加して、そこに集まったメンバーの積極的態度にわれわれ大人が煽られる思いだった。彼らは既に教育を変える提言をする気構えに入っており、そのために専門的知識を得たいという「学びの意欲」を顔に表している。わたしは早くも質問責めに遭った。

東京会場に来場した中で、最も遠い群馬県前橋市からの女子3人組は、片道2時間半以上をかけて渋谷まで駆けつけたという。その熱心さに驚き、私が2週間後に彼女たちの高校と隣接の大学までイベントに行くことになっていると告げると、早速、当日開会前に「前橋プレ勉強会」ができないかとの申し出があった。その真剣さに、さらに驚かされた次第である。

2016年の年が明けると、沖縄から北海道まで全国5会場を拠点にしたプレ会議が始まった。ことに印象深いのは、先頭を切って1月に行われた那覇での会議である。なにしろ日本は東京一極集中社会で、何でも東京中心になりがちだ。事実、キックオフは東京からだった。それにネット上で参加した沖縄の高校生たちが、いきなり今度は全国へ向けて発信し、電話会議アプリ「Popcorn」を使った話し合いのファシリテーターを務めるのである。

沖縄プレ会議にて
メンバーにアドバイスする寺脇氏

大丈夫？心配したが、それは全くの杞憂だった。彼らはみごとに「プレ会議」を運営し、次へとつなげた。福岡、仙台、札幌、広島と続くプレ会議の形は、初回の沖縄でしっかりと完成したのだった。会議を重ねるごとに高校生たちの相互理解は深まり、それにつれて論点も整理されていく。その過程を毎回参加して体感することは、私にとってうれしく、また楽しい経験だった。

私が文部科学省在職中に目指したのは、子どもも大人も生涯にわたって自ら学び、自ら考える「生涯学習社会」の実現だ。大人に関しては社会全体の賛同を得られたものの、小・中・高等学校の児童・生徒にも自ら学び考える喜びを知ってもらおうという試みは、「ゆとり教育」とか「学力低下」とかの誤解に基づくレッテルを貼られて難航している。

だが、100人委員会の高校生たちはこの活動を通してその喜びを獲得したに違いない。夏の全国会議で全員顔を合わせての議論、また秋にまとめた文部科学省への提言からは、自力でしっかり学び、自分の頭でしっかり考えたことが明確に窺えた。よかったね、みんな。

九州プレ会議にて
熟議のまとめ発表にコメントする寺脇氏

みんなの提言は多くの文部科学省の幹部たちが力強く受け止めてくれたので、その提言を生かして教育政策を進めていってくれるはずだ。私が目指した教育が新しい学習指導要領に生かされているように、100人委員会の皆さんの思いを受け止め、文部科学省は必ず皆さんの信頼を取り戻すだけの仕事をしてくれると、私は予測できる。

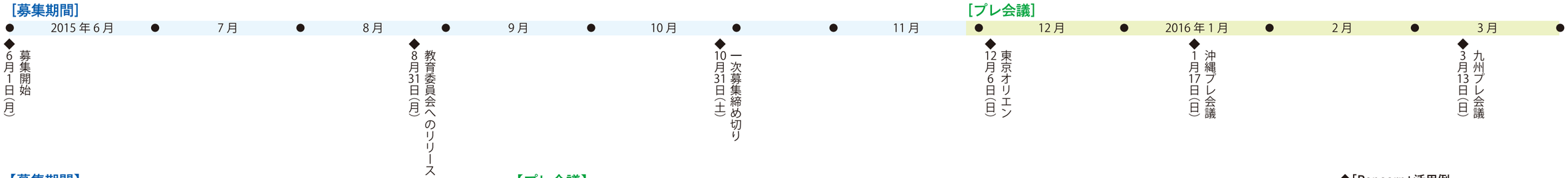
今回の提言が実現していくのを楽しみに、100人委員会の皆さんは大学で、あるいは残された高校生活で、学びを一層深いものにしていってください。

2015年12月号

2016年1月号

2016年2月号

◆Comm100 活動年表



【募集期間】

2015年の6月から募集を開始。

・**募集期間：**

2015年6月1日～2015年10月31日
（2016年4月30日最終締め切り）

・**参加対象：**

全国各地の高校1・2年生
（2015年4月時点）

・**告知方法：**

①Facebookページ
②螢雪時代誌面
（2015年8月号～2015年11月号）
③全国都道府県教育委員会へのリリース

・**課題：**志望動機800文字のエッセイ

・**申し込み方法：**

インターネットフォームにて応募受付

◆Facebookページの応募フォーム

Point 1
Facebookでタイムリーな情報発信

Facebookは情報の公開、更新が容易に行えるため、配信する情報を当活動の告知と募集だけに限定せず、運営事務局や活動を支える有識者の紹介や、寄せられたQ＆A紹介などをして応募の後押しとなるようなコンテンツを配信した。毎週情報を配信し、当活動の情報をFacebookページ上に集めておくことで、応募希望者が疑問を解決し、応募へのハードルを下げられるように試みた。

Point2　螢雪時代で活動の様子を連載

毎月見開きカラー2ページ（号によってページ数増あり）にわたって活動を紹介した。募集期間は誌面上で募集を行い、のちにプレ会議の様子を紹介、全国会議に向けた準備の様子、提言のまとめを掲載した。

螢雪時代は大学進学の情報が掲載されている情報誌で、高校で進路指導の際によく読まれている。そこに活動の様子を掲載することで、参加者だけでなく保護者や学校関係者からの信頼感を獲得することが出来たと考えられる。

【プレ会議】

半年以上に及ぶプレ会議期間は、運営事務局が全国各地のプレ会議開催地を順次訪問。訪問した地域に本会場を設置し、そこを拠点にオンライン会議を開催した。参加者は①本会場、②サテライト会場（設置しない回もあった）、③オンラインのいずれかの形で参加した。つまり、実際に顔と顔を合わせて会議に参加するのは、本会場とサテライト会場に参加するメンバーのみで、オンラインで参加する場合は自宅や学校など、居場所を選ばずに参加できた。

オンライン会議は無料通話アプリ「LINE」、「Popcorn」というICTツールを活用した。熟議の冒頭では寺脇氏による熟議テーマの解説や目的の説明、事務局からはルールの確認やその日のゴールなどを伝え、参加者間のマインドを整えてから熟議を始めるように心がけた。

九州プレ会議にて
オンライン上でコミュニケーションをとる様子

第3回プレ会議（九州プレ会議）以降は、各々の興味関心のあるテーマ毎に参加者同士が集い、9グループに分かれてより実践的な熟議に取り組んだ。
（熟議の詳細はP21、P22）

また、各地で開催したプレ会議のプログラムは全て同じ構成で行った。午前中にアイスブレイクを兼ねたその地域ならではのアクティビティを開催。昼食を経て午後に会議を実施する形式で行い、同じ地域の参加者同士や事務局との交流、仲間意識の醸成に努めた。

Point 1
無料通信アプリ「Popcorn」を活用

第1回プレ会議（東京オリエン）では動画配信業者を手配して、オンライン上で同時編集が可能なメモアプリを使用して会議を行った。しかし、慣れないアプリに悪戦苦闘してインタラクティブな会議にすることができなかった為、参加者の発案により「Popcorn」というアプリを使用することにした。

◆「Popcorn」活用例
（第3回プレ会議（九州プレ会議）より）

台湾から（留学先）

青森から（自宅）

サテライト会場から（東京）

東北プレ会議にて
熟議の発表をするメンバー

◆プレ会議について

日　付	プログラム名	熟議テーマ
2015年12月6日（日）	第1回プレ会議 東京オリエン	熟議のテーマを見つけよう
2016年1月17日（日）	第2回プレ会議 沖縄プレ会議	熟議ルールを考えよう
3月13日（日）	第3回プレ会議 九州プレ会議	各グループの課題の洗い出しとまとめ
4月17日（日）	第4回プレ会議 東北プレ会議	各グループ、課題の解決策を考えよう
5月15日（日）	第5回プレ会議 北海道プレ会議	他のテーマグループの話を聞いてみよう →各テーマの共通点を見つけよう
7月17日（日）	第6回プレ会議 広島プレ会議	自分たちのグループで提言したいこと

2016年3月号

2016年4月号

2016年5月号

2016年6月号

2016年7月号

2016年8月号

◆Comm100 活動年表

［プレ会議］　［全国会議］　［提言提出］

2016年4月 ◆4月17日(日) 東北プレ会議 ◆4月30日(土) 最終募集締め切り　5月 ◆5月15日(日) 北海道プレ会議　6月 ◆6月23日(木) 大学入試センター訪問　7月 ◆7月17日(日) 広島プレ会議　8月 ◆8月8日(月)～11日(木) 全国会議　9月　10月　11月 ◆11月2日(水) 文部科学省提言　12月　2017年1月

（提言書）

【大学入試センター訪問】

2016年6月23日(木) 大学入試センター試験の運営において中心的な役割を担っている、「独立行政法人大学入試センター」を訪問。現役の高校生が訪問することは異例の出来事であった。入試センター理事長、理事と参加者代表4名（1名は「Popcorn」を使いオンライン参加）で対談した。現行の大学入試制度について研究・熟議を重ねていく中で、センター試験の役割や重要性を認識していった参加者。センター試験の成り立ちや実施に至るまでの過程など、日ごろ疑問に思っていた点、自分たちの研究では分からなかったことを発見し、新たな視点に触れることができ、理事と有意義な意見交換を行った。

参加者と理事長、理事で集合写真

【全国会議】

・**日時**：2016年8月8日(月)～11日(木)
・**場所**：国立オリンピック記念青少年総合センター
・**参加費**：無料
・**参加者**：プレ会議に2回以上出席した参加者47名

全国会議のメインイベントは、3日目に実施した「まとめの発表会」である。この発表会に向け、各熟議グループでプレ会議期間中に熟議してきた内容の振り返りや熟議を深め、論点をまとめ、活動の集大成となるよう取り組んだ。

この発表会には、文部科学事務次官をはじめとする教育関係の方々に多数ご出席いただき、グループ毎の「熟議グループ発表」と、参加者が一番伝えたかった想いをひとりずつ伝える「個人発表」を行った。

◆全国会議プログラム

8月8日(月)	8月9日(火)	8月10日(水)	8月11日(木)
オープニング／ ウェルカムスピーチ アイスブレイク オープニングパーティー 熟議① 「これまでの熟議・振り返り」	オリエンテーリング 熟議② 「どんな社会を目指すのか」	熟議③ 「どんな入試が必要か」 発表の準備 リハーサル まとめの発表	クロージングセッション クロージングパーティー チェックアウト

Point 1　参加者同士の交流

約半年間のプレ会議期間を経ているとは言え、参加者同士はほぼ初対面でこの日を迎えていた。参加者同士が十分に心を開き、互いを仲間として受け入れ、安心して熟議を行えるよう心がけた。立食式の食事や、東京オリエンテーリングを実施。会場もBGMを流し、息抜きのスナックを用意するなどの工夫を凝らした。参加者が誰とでも自由に話せる環境が整い、熟議のベースが出来上った。

Point 2　参加者の自主性の尊重

全国会議のプログラム構成、熟議の進行、まとめの発表会の企画や司会進行は高校生の運営委員を中心で行った。参加者の自主性を尊重し、極力自分たちが目指す形を実現させることで会議そのものへの主体的な姿勢を生み出すことができた。

Point 3　対面で熟議を行う

秋に予定されている政策提言に向けて、これまでの熟議の内容をまとめあげた全国会議。それまではオンライン上でしか繋がっていなかった関係性だったが、実際に顔を合わせ、今まで伝えきれなかったこと、分かり合えなかったことを時間をかけて乗り越えていくことで、かけがえのない仲間となった。

お互いを理解し合い、熟議が深まったことが結果として本当に自分達が求めていた提言のベースとなり、最終的な政策提言の土台を作りあげることができた。

全国会議まとめの発表会にて、個人発表を行う参加者

全国会議の熟議中、段々と熱が入り、他のグループと交ざりながら立って熟議する参加者たち

【文部科学省報告会】

・**日時**：2016年11月2日(水)
・**場所**：文部科学省事務次官室
・**参加費**：無料
・**参加者**：文部科学省文部科学事務次官 前川喜平氏、大臣官房審議官 浅田和伸氏、初等中等教育局児童生徒課長 坪田知広氏、初等中等教育局国際教育課長 井上卓巳氏、初等中等教育局高校教育改革PT総括リーダー 今井裕一氏、高等教育局大学振興課大学入試室長 橋田裕氏、初等中等教育局参事官付学力調査室長 高木秀人氏　（2016年11月2日時点）
・**高校生参加者**：糸井あかり(群馬県)、大森凪(福島県)、金子汐里(神奈川県)、小嶋大生(東京都)、菅原衣織(北海道)、多和田茉夏(沖縄県)、比嘉絵野(沖縄県)、星崎伶奈(群馬県)、松本歩純(岐阜県)、三浦菜月(青森県)、村木菜生(群馬県)

この活動の集大成として、全国会議での熟議をさらにまとめて「Comm100提言書」を作成。代表者11名が文部科学省を訪問し、提言について発表を行い、提言書を提出した。提言書はグループ毎の提言をまとめ、参加者それぞれの想いを載せたものである。この報告会は、文部科学事務次官をはじめとする関係者が立会い、高校生の発表と関係者との対談会を行った。

Point 1　自信の根拠が生まれる

グループの代表として提言を提出。発表した参加者は、今までの熟議の内容、メンバー一人ひとりの気持ちを取りこぼすことのないように、入念な準備と練習を重ねて報告会に挑んだ。大勢の関係者や報道陣の前で緊張を乗り越えて発表をすることは、参加者が自信を持つきっかけとなり大きな達成感をもたらした。

Point 2　社会に対する関心が生まれる

実際に教育行政に関わっている現役の文部科学省関係者を前にして発表を行い、コメントをいただき、お話を伺うことで、文部科学省に限らず教育に関わる時事問題に一層関心を持つようになったようだ。

自分たちで政策提言し、「想いや願いを反映させてほしい」と思うことで、政策の動向に注視するようになり、社会の動きや行政に対して関心を持つようになった。

文部科学省報告会にて、文部科学事務次官と

2016年9月号

2016年10月号

2016年11月号

2016年11月号

2016年12月号

2016年12月号

高校生100人委員会における教育的効果

（2016年8月10日　全国会議）

この活動では、「文部科学省へ政策提言をする」というゴールを設定し、参加者を募集して、プレ会議や全国会議で熟議を重ねてきた。設定したゴールを達成することは当然のことながら、その過程において、参加者に大きな変化と成長がみられた。

このような成長を遂げた高校生が全国各地におり、この事業を通じて、参加者の今後の礎を築いた事実こそがこの全国高校生100人委員会がもたらした最大の成果であると考えられる。

【多様性との出会い】

この活動に参加した高校生は、居住地域だけでなく、所属している高校や学科、予定している進路も様々であった。普段の生活では、何か特別な活動をしていない限り、どうしても自分と同じような環境にいる高校生としか知り合うことはできないが、当活動で多種多様な高校生がいることを知り、出会い、共に活動をしたことで参加者に大きな成長をもたらした。

多様性との出会いである。

・価値観の変化、広がり

自分とは異なる環境、立場に置かれている同世代の存在を知ることで、自分の置かれている環境以外にも、リアリティを持って関心を持つようになった。

つまり、自分の価値観や知っている世界は実は限られた世界ということに気がつき、外の世界への興味・関心を持ち、他を受け入れるきっかけとなったのだ。

・客観的な視点、新たな視点が生まれる

他者との違いを認識し、他の価値観に触れることで、自分自身を客観視できる様になり、主観的な考えから一歩踏み込んだ考えが生まれた。様々な人の考え方を知り、思考回路を取り込むことでそれまでの自分にはなかった視点を持つことができるようになるのである。結果として、自らの先入観に頼って物事を判断するのではなく、物事の本質を見極める力を身に着けたように見受けられる。

【熟議がもたらした協調性】

多様な高校生同士が、活動を通して常に熟議を行った。熟議とは、ディベートや討論の様に主張に優劣や勝ち負けを決めるものではない。互いの考えや主張を理解し、自分の認識を深め、協働しながら解決策を探していくものである。

活動開始当初のプレ会議では、不慣れな熟議という手法に戸惑い、自分の意見を押し通そうとしたり、自己主張の強い人だけに発言権が偏ったり、お互いを理解するに至らないまま、何処か消化不良のまま熟議を終えるケースもあった。

そこで参加者は熟議のルールを考え、そのルールに則り、プレ会議を重ねてトレーニングを行った。このプロセスを経て徐々に熟議らしい熟議を行えるまでに成長し、協調性を持って夏の全国会議に参加することになったのである。

Point 1　独自の熟議ルール

第2回プレ会議（沖縄プレ会議）にて、トレーニングとしてComm100独自の熟議ルールを作るための熟議を行った。

その熟議を始めた際、この活動には全国各地から参加者がおり、もちろん様々な方言や話し方が飛び交ったのだ。その話し方が分かりにくいということで、「方言を禁止するべきなのでは」という意見が飛び出した。しかし、熟議の結果、「方言を互いに理解し合おう。方言もComm100の特徴だから。」となり、「発言は簡潔に丁寧な言葉遣いで」というルールが生まれた。

自分たちがルールを定めることの必要性を体感して策定した熟議のルールはどれも実用的なものばかりであった。

◆Comm100の熟議ルール（第2回プレ会議　沖縄プレ会議より）

全体が気をつけること	・皆が同じ志を持っているということを意識する ・お互いのことを深く知ろうとする ・プレ会議の後にプレ会議の復習をする
聞く立場	互いを尊重して異なる考えを理解するため、また分からないと思ったら分からないことをそのままにせず質問できる雰囲気を作るために、主に以下のことを心がける ・話を否定をせず、最後まで静かに聞く ・質問は話の最後にする ・話し手が話し終えたら反応する
話す立場	他の人の意見を尊重しながら発言し、意見がぶつかっても仲良くなれる雰囲気をつくる ・発言は簡潔に丁寧な言葉遣いで（具体例を出しながら話すと聞き手はわかりやすいかも） ・話したあとに、聞き手の反応を促す ・アイデアは気後れせずにどんどん出していこう ・会話をスムーズにするために、発言する前に一度自分の中で整理する（オンラインの会話なので）
アプリに関して	・Popcornでしゃべっていないときはミュートにする ・話し終わったら「以上です」「どうぞ」「終わりです」など、話が終了した合図を出す
進行においてのアドバイス	ファシリテーターになったときに意識するといいポイント ・相手の名前を呼びかけて、個人に話をふって、多くの人の発言を促す ・意見を聞いたあとに全体でその意見の共通認識を取る ・進行役とは別に書記係を設ける（書記係が付箋メモを取ったり、LINEで写真などを送る）

・人の話をよく聞くようになる。

前述の通り、熟議は、お互いの意見を聞いて自分の考えや意見を改めていくものであり、「聞く力」が求められる。相手の話を聞かずに自分の考え、主張ばかりを発信しても、熟議のプロセスでは淘汰されるため、自分の伝えたい事をしっかり熟議に落とし込むためには、他の人の話に耳を傾ける関わりが必然であった。「相手をもっと理解したい。でも自分のこともっと知ってほしい。」こんな気持ちを参加者が持ち始めた頃から熟議は一段と議論を深めていった。また、相手を理解しようという姿勢が段々と濃くなっていった。

熟議が深まり机に乗り込んで話す様子

・コミュニケーション能力が身につき、能動的に参加する

プレ会議では本会場に集まった参加者全員が、各グループのファシリテーターを経験するようにグループ作りを行ったが、ほとんどの参加者が、ファシリテーターは未経験であった。しかし、話し手と聞き手のそれぞれを俯瞰し、両者が円滑な熟議を行うためにはどのように発話を促せばよいかを考えるようになり、ファシリテーターという第三者の目線で熟議を見渡すことで、会話を広げやすくするために話し手が工夫すべきこと、聞き手が気をつけることに気がつくことができるようになった。その参加者自身が次回以降のプレ会議に能動的に参加する姿勢を醸成することに繋がった。

Point 2
参加者が順次、ファシリテーターを経験

ファシリテーターを経験することで、熟議を進行する難しさを体感し、次回以降の熟議の際にファシリテーターに協力的な姿勢を持つようになった。この連鎖がプレ会議の後半になればなる程、熟議を深める要素になった事は紛れもない事実である。

さらに、ファシリテーターとして熟議の内容をまとめて、全国からオンラインで参加している参加者に向けて発表する経験を通じて、人前で話すことへの抵抗感をなくし、自信を持って発言することができる素地が形成された。

この成長の様子は参加者のプレ会議の様子と全国会議の様子を比較すると一目瞭然である。

北海道プレ会議にて
グループ毎の熟議に取り組む様子

・物事の本質を捉える力がつく

正解のない（もしくは、正解が複数ある）熟議を経験していく中で、知識の多さや偏差値の高さが必ずしも物事の本質を捉える力に直結している訳ではないことに気がつき、プレ会議以外の日に自主的に「Popcorn」を活用して熟議を進めていくグループがいくつも存在した。

知らない事は調べる、仲間に聞いてみる等、学びをどんどん深める事で熟議が一段と興味深いものになる様子が見られた。

Point 3
テーマに分かれて熟議を行う

第３回プレ会議（九州プレ会議）からは、９つのテーマに分かれて、一層具体的な熟議を行った。熟議テーマは参加者がそれぞれ熟議・研究したいテーマを発表し合い、グループが形成された。各自が希望するグループに所属したことが主体的に熟議に参加できるモチベーション作りに役立った。

英語教育グループ

格差学歴グループ

授業体制グループ

授業内容グループ

授業の制度本質グループ

大学入試制度グループ

特殊な教育グループ

日本の入試グループ

能動的な授業グループ

【主体的な関わり】

・高校生運営委員会の発足

当然のことではあるが、事務局や有識者の提案ややり方通りに運営するのではなく、参加者が積極的に運営に携われる環境を用意するために、事務局があまりにも主導しないように心がけた。その結果、2016年５月に有志による「運営委員会」が立ち上がった。この運営委員会を中心として参加者から出た意見を積極的に活動に取り入れることで、活動と参加者の距離が縮まり、積極的に活動に参加する参加者が増えた。

運営委員メンバー

Point 1　ナナメの関係

この活動の運営にあたり、携わる大人と高校生の関係を上下の関係ではなくナナメの関係となるように心がけた。事務局に大学生のインターンを参加させることで、事務局側と、高校生の両方の立場を理解する橋渡し役を設けた。

また、全国会議には大勢の有識者や文部科学省の方にご参加いただき、大人のスタッフも多く参加したが、誰もが高校とお揃いの「Comm100Tシャツ」を着用し、高校生が親近感を持って関われるように試みた。

この活動は「大人にやらされている」感を持たせるのではなく、参加者が能動的に関わり、自分たちで作り上げるというモチベーションを大切にした。

全国会議オープニングにて

【社会との出会い】

この活動には全国各地の多様な高校生だけではなく、多くの多様な大人の協力を得ることができた。

活動発足時から参加者へのメッセージを提供してくださった有識者の方々、提言を受け取り、全国会議にも足を運んで高校生のメッセージに熱心に耳を傾けてくださった文部科学省の関係者の方々がいた。さらに、各地で開催したプレ会議には開催地の教育関係者や報道関係者の方々にお越しいただくこともあり、その出会いがその後の参加者の活動の場作りにもつながっている。

「大人には自分の想いとか考えを伝えても聞いてもらえないと思っていたけど、熱心に聞いてくれる大人がいることに驚いた。」「自分の話をどうやったら聞いてもらえるのか、どう伝えれば自分がやりたいことを実現できるように説得できるのか、少し分かった気がする」という参加者の声があった様に、この活動を通じてこれまで出会うことがなかった大人との接点が高校生の学びと成長を促した。

この活動を通じて、世の中は自分が思っている以上に広く、多様であるということを高校生は実感したに違いない。また、高校生自身も大人たちが向ける期待を感じ、さらに18歳選挙権が実現し、選挙を通じて自分たちが社会に関わる接点を持つことを体感しながら、自分たちも社会を構成する一員であるという自覚が芽生えたことで、より一層、社会問題に問題意識や興味が沸いたように見受けられた。

この活動が高校生と社会の接点になったことはこの活動の当初の目的であった、教育を受ける当事者の声を社会に発信するということにつながったのである。

特定非営利活動法人
教育支援協会
Supporting Union for Practical-use of Educational Resources

〒105-0003　東京都港区西新橋1-20-10　西新橋エクセルビル4階
TEL 03-3539-3826　FAX 03-3539-3822
Mail：info@kyoikushien.org　　http://kyoikushien.org

発行者：特定非営利活動法人 教育支援協会

本報告書についてのお問い合わせは、メールにて受け付けております。
無断転載、複製および転訳載を禁止します。
info@kyoikushien.org

© 教育支援協会　all rights reserved